

苫東環境コモンズの活動をまとめて報告



haskap
NEWS LETTER

～コモンズの現地から発信する～

勇払原野のSPIRIT

コモンズの視線

ニュースレター第30号をお届けします。夜明け前の南の空にはもうオリオン座が輝いており、そうか、間もなく秋本番どころか薪ストーブの季節を迎えたのか、と気づきました。薪とか薪ストーブを環境に負荷をかけない単なる暖房の仕組みととらえていると喜びは限定的ですが、放置された雑木林の保育をしながら、放置されれば腐るものを、手間暇かけて林から引きずり出して使うという、苫東コモンズの里山仕事を合わせて見ると、勇払原野の歴史的現実と向き合っていることを痛感します。ここの交流は間もなく半世紀になり、定点で地域の「自然と人」から多くを学べたことに対し、つくづく「幸運」だったと感謝するこの頃です。(草苺)

NPO <http://hayashi-kokoro.com/commons00.html> 雑木林だより <http://hayashi-kokoro.com/zouki00.html>

TOPIC 1

大島山林のサインをリニューアル



「大島山林で何をしているの?」と聞かれれば、「森林公園を創ってる」と答えています。その中核をなすのは雑木林そのものと、そこを縫う網の目のようなフットパスです。この小径は実は保育で得られた材の運搬路であると同時に、まだ数少ない町内の散歩者のため。その案内をして来たサインが、倒れたり増設が待たれる状況になったため、今季は利用促進の一環でサインのリニューアルと、2か所に懸案の休憩場所を設けました。20基を超えるサインは現在地がわかるマップ付きの労作です。

公共が設ける公園には遠く及ばない手づくりの森林公園ですが、間伐材の薪利用のシステムをあわせてみた時、結構進んだ取り組みだとされます。資機材の経費は、余った薪を引き取ってもらったお礼でまかなわれているという地味な循環が埋め込まれています。

TOPIC 2

学びながら森を育てる

上のトピックでふれた雑木林の保育は、実は出来上がったマニュアルがありません。あるのは一般的な原理と伐倒の技術書などに限られるため、当NPOでは、保育の方向を誤らないよう、常に北大などの森林科学の研究機関とコンタクトを持ちつつ道内外の様々な事例にもふれ、時には森林学会などで報告するなど、最新の知見を標榜しながら関わってきました。



身近な道内事例もできるだけ会員全員で見とくた

身近な道内事例もできるだけ会員全員で見とくた

めに、毎年、森づくり研修を行っており、今年6月は道北に出かけて北大の雨竜研究林を見せてもらいました。案内してくれた坂井技官は、苫東コモンズのチェーンソー研修に参加したことのある勇払原野の経験者で、道北地方の天然更新の現状と課題について熱い解説と案内をしていただきました。

研修は、翌日、旭川で木製品の展示なども見学し、普段はなじみのうすい本格的な林業の川上と川下を見ることができました。その後、研修は8月に身近な厚真で、篤林家による農家林の育成を見学し、10月初旬は厚真早来にある三菱マテリアル社有林を訪問する予定です。

TOPIC 3

薪棚の土台にパレット譲り受け



薪ストーブを使用している人はすでに気づいていることですが、薪は燃やす直前の扱いは、居間などの「家具調度」として、燃やされるまでの束の間鎮座

します。このようなオブジェが、泥だらけだったりキノコが生えて腐っているようでは価値激減です。

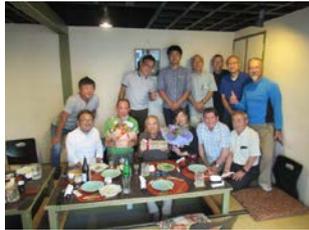
苫東コモンズでは、会員の消費がメインとは言え、この点を改善すべく、薪棚の基礎部分にやや堅牢な木材のパレットを敷くことになりました。提供してくれたのは地元の農機具卸組み立ての会社の社長さん。地元の会員とのつながりで実現したものです。釘を抜いたりつないだり、若干の補修も必要ですが、次第とプロの薪屋さんの品質に近づいてきました。

TOPIC 4

現役会員の卒寿を祝う

大島山林の直近に住む地元会員/右田時夫氏が8月に卒寿を迎えられることを記念して、会員有志でささやかな卒寿を祝う会を開きました。右田さんは、NPO法人になって5年目の2014年に入会されてから、とても80代後半とは思えない超人的な働きをされてきました。ビニールハウス技術を活かした作業テント

の付設や、大型トラクターを使った除雪、若者と一緒の除間伐、さらに近年は薪割り機の操作を一手に担ってきました。



苫小牧市内の四季の味「熊谷」で催されたお祝いの会には会員のほぼ全員が集まり、右田さんに縁の深い大島山林のナラ材を削った薪に寄せ書きをして贈呈しました。

TOPIC 5

雑木林保育の原点「静川の小屋」のリフォームに着手



苫東緑地で雑木林の保育に着手したのは平成2年ですが、その拠点となってきたのが苫小牧市静川の雑木林ケアセンターです。平成9年に厚真産のカラマツで作られたログハウスも今年で25年を迎え、補修や整理整頓の必要が出てきました。特に、正面妻側のログエンドの腐れを押さえるために増設したベランダの屋根が、室内の採光を妨げていたため、新たに窓を増設することにしました。窓部分の丸太をぶち抜くためには埋め込まれた鉄筋の位置を探し当てる必要があり、準備に手間取りましたが、作業は順調に進み、9月17日に特注の窓ガラスが入ってほぼ竣工。

小屋はこの機会に椅子仕様とするため床の絨毯をはがし、小屋周りのコナラの大木で作ったテーブルを一段持ち上げて、資材棚や本棚を用意します。特に、本棚は会員の技術顧問・安部文史朗氏が寄贈してくれた伐倒技術や森づくりに関する書籍を納め、「文ちゃん文庫」などとして活用の予定です。

令和4年5月連休以降の主な活動

*行事末尾の数字は参加者数

- 4/30 Sat 薪割り、大島山林の保育 (片付け)、静川から丸太運び、来年の運搬路開設、倒木処理、案内板作業 9
- 5/6 Fri 案内板作業 1
- 5/7 Sat 大島山林の保育 (片付け)、薪配達 11
- 5/14 Sat 薪割り・薪積み、静川から丸太運び、薪小屋手入れ 15
- 5/15 Sun 探鳥会下見 1
- 5/18 Wed 静川保育 1
- 5/21 Sat 探鳥会、薪台材運び込み、薪割り、スドキ、わらび 29
- 5/28 Sat 案内板設置、薪割り・薪積み、森作業、スドキ 14

- 5/29 Sun ヤード刈払 1
 - 6/3 Sat 新径路づくり、薪割り・薪積み、森作業 14
 - 6/11 Sat 薪割り・薪積み、フットパス刈払、小屋の棚製作 11
 - 6/12 Sun 案内板作業 1
 - 6/17 Fri ハスカップ確認 1
 - 6/18 Sat 薪割り・薪積み、フットパス刈払、小屋の棚製作、青テント補修 16
 - 6/25 Sat 森づくり研修1日目 14+1
 - 6/25 Sun 森づくり研修2日目 12
 - 6/30 Thu 薪割り 2
 - 7/1 Fri 薪割り 2
 - 7/2 Sat 薪割り・薪積み、フットパス刈払、青テント補修 10+1
 - 7/6 Wed 刈払、川エビ 1
 - 7/7 Thu 薪割り 2
 - 7/8 Fri 薪割り 2
 - 7/9 Sat 薪割り・薪積み、フットパス刈払 15
 - 7/14 Thu 薪割り、大島作業 3
 - 7/15 Fri 薪割り 2
 - 7/16 Sat 薪割り・薪積み、静川フットパス刈払 11
 - 7/23 Sat 森づくり研修その2 14(12+1+講師1)
 - 7/30 Sat 薪積み、静川作業 9
 - 8/4 Thu フットパス作業 1
 - 8/6 Sat 薪積み、静川小屋作業・風倒木処理 6
 - 8/11-21 お盆休み自主作業 11
 - 8/27 Sat 薪積み、刈払作業 6
 - 9/3 Sat 静川小屋作業、大島ヤード作業 10
 - 9/8 Thu 台風の検分 1
 - 9/10 Sat 静川小屋作業、大島ヤード作業 8
 - 9/17 Sat 静川小屋作業、大島ヤード 9
 - 9/24 Sat 静川小屋作業 6
- *昨年度 4/1—3/31 の実稼働人数は延べ 634 人、2022/4/末から 9/24 は 275 人でした。

編集後記

■近年の活動を振り返ってみると、活動の幅や頻度が一向に落ちていないことに気づきます。若がえった事務局がコツコツと雑務をこなしてくれていることとともに、扱っている里山的な林が次々とわたしたちの行為を待っているという現状もあります。それに自然に応えている、という構図のようです。■コロナ禍のもとで、久々に瀧澤代表の森林セラピーをテーマにしたフォーラムは縮小せざるを得なくなり、お迎えする講師が東大の「癒しの森づくり」の斎藤先生お一人になりました。10月の今年3回目の研修を含め、食欲に学び森づくりに励む姿勢は堅調です。■今年も勇払原野の自然の恵みは4月の川エビや5月のポウフウを含めてコンスタントにいただきました。唯一、定番のハスカップが昨年の早成り、秋の2度咲きの影響で不作が続き、恒例のつた森山林でのハスカップ摘みができませんでした。予定していたジュンサイは採取時期を逸したため来年の楽しみに回します。もうひとつ山海の珍味として期待したいのは、前浜である弁天海岸での稚魚フライを用いたサクラマスですが、これはちょっと手ごわい相手になりそうです。■7月末、超大型というべきヒグマの足跡が、静川の小屋の前で確認されました。ちょうど道東で牛を襲っていたヒグマの足幅より大きかったため体重が300kgをこえるのではないかと推測も流れました。苫東緑地が事実上の大型哺乳動物のコリドウや生息地になり、いやが応にも共存せざるを得ないならば、往来する人々の安全確保とともに、なにかスマートな共生の道はないかと意見交換されること、しばしばです。研究者、行政、市民の知恵を合わせた策をここから念願するものです。

*お問い合わせ・ご感想は、kt-884-556@nifty.com 090-6999-2765 (草薙) まで。